

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 1 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2012

課題番号：20320096

研究課題名（和文）歴史における女性の身体と看護・医療 生・老・病・死

研究課題名（英文）Women's Body, Nursing and Medical Care in History from the Viewpoint of Life, Old Age, Illness, and Death

研究代表者

細川 涼一（HOSOKAWA RYOICHI）

京都橘大学・文学部・教授

研究者番号：21219190

研究分野：日本中世史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：女性、身体、看護、医療、生・老・病・死

1. 研究計画の概要

京都橘大学には、文学部・人間発達学部・現代ビジネス学部・看護学部の人文学部・社会科学・自然科学の三つの分野にわたる学部があり、一方、女子大学として出発した経緯を踏まえて、女性歴史文化研究所という女性の歴史と文化をめぐる学際的研究を行う研究機関を擁してきた。ことに女性歴史文化研究所では、女性の身体と、看護・ホスピタリティーに女性が果たした歴史的役割をめぐる、歴史学・看護学の教員を中心に共同研究を行ってきた。今回の研究は、その成果も踏まえて、女性の身体と出産、老・病・死をめぐる問題、また、家族や地域の中で看護・医療に女性が果たした歴史的な役割をめぐる、歴史学・文学・仏教美術史・看護学などの学際的な分野にわたる共同研究を行うことを企図するものである。地域としては、日本を中心としながらも、ヨーロッパ・アジアの諸地域との比較史的な視角も行いながら研究を行う予定である。

これまで、この分野に関わる研究としては、文献史料に依拠した歴史学の立場からの医学史、慈善救済史・社会福祉史、女性史、臨床経験を前提とする看護学の立場からの看護史が個別的な研究分野としてあるが、それらを総合しての女性の身体と看護・医療をめぐる研究はなされて来なかった。本共同研究では、これらの研究、ことに歴史学の分野の研究と看護学の分野からの看護史を学際的に踏まえ、女性の身体と看護・医療、女性の生、老、病、死をめぐる問題を総合的に研究しようとするものである。女性は歴史の中で看護・医療の客体としてのみではなく、自ら看護・医療の主体として家族や地域の中で大きな役割を果たしてきた。その歴史的事実を、

近代看護師の歴史のみではなく、前近代をも含めた大きな歴史の中で明らかにしていきたいと考えている。

2. 研究の進捗状況

本共同研究では、歴史学（日本史・西洋史・アジア史・女性史）と看護学、文学の既往の研究成果を持ち寄り、その成果を摺り合わせて今後の共同研究をどのように発展させていくのか、その知識を共同研究者が共有することに第一の目的が置かれた。そのために各分野の文献を蒐集するとともに、共同研究会を何回かにわたって開催した。研究会では、各分野における研究史の現状を整理し、今後に向けての展望を示す研究発表が行われる一方、当該分野の新たな実証的水準を示す研究発表も行われた。

3. 現在までの達成度

当初の計画以上に進展している。

3年間で以下の共同研究報告を行った。また、関連図書・資料の蒐集も順調に進み、研究代表者・研究分担者による著書・論文発表も順調に行われた。

2008年度

(1) 松浦京子「'motherhood' 母であることをめぐる人びと 前世紀イギリスの出産・育児の諸相」

(2) 南 直人「近代ドイツにおける栄養学の成立と食教育の展開」

(3) 細川涼一「中世都市鎌倉の福祉」

(4) 浅井雅志「死への眼差し ロレンス、三島、ハイデガー」

(5) 横田冬彦「京都橘大学所蔵・信濃善光寺門前茶屋「島田屋文書」について」

2009年度

(1) 高久嶺之介「日本近代の文明開化と京都の産婆研究について」

- (2) 高橋みや子「お産の歴史」
- (3) 小野 浩「11世紀ズィヤール朝の処世訓戒 『カーブス・ナーメ』から」
- (4) 高久嶺之介「1881年イギリス皇孫の来京」
- (5) 細川涼一「公家将軍宗尊親王の医師」
2010年度
- (1) 有坂道子「幕末京都の医家と医療」
- (2) 増淵 徹「『小右記』にみえる医師について」
- (3) 島居一康「中国女性史研究の現状と課題 日本・台湾・中国における」
- (4) 南 直人「『国産』の嗜好品を求めて ドイツにおけるコーヒーと砂糖の受容をめぐる諸問題、近代世界システム論と食の歴史との接点」

4. 今後の研究の推進方策

2011年度には、過去三年度の実績を踏まえて、歴史学(日本史・西洋史・アジア史・女性史)と看護学、文学の既往の研究成果を持ち寄り、その成果を摺り合わせ、その知識を共同研究者が共有するとともに、完成年度の論文集刊行に向けた各自の論文の執筆分担を決めていきたい。最終年度である2012年度には、研究成果の論文集を執筆・刊行する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

高久嶺之介「明治の京都を訪れた外国人皇族たち イギリス・ロシア・オーストリアの皇族たち」(『京都橘大学女性歴史文化研究所紀要』19号、2011年3月、査読有、11-19頁)

細川涼一「石清水八幡宮の柳禅尼如鏡と叡尊」(『佛教史研究』47号、2011年1月、査読有、1-12頁)

細川涼一「黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』」(『日本史研究』574号、2010年6月、査読有、38-55頁)

増淵 徹「平安京と捨て子に関する覚え書」(『京都橘大学女性歴史文化研究所紀要』18号、2010年3月、査読有、133-143頁)

小野 浩「ディルシャード・ハトンとそのファルマーン 14世紀イランにおける女性の発令書」(『京都橘大学女性歴史文化研究所紀要』18号、2010年3月、査読有、1-19頁)

〔学会発表〕(計1件)

鈴木要子「京都市に在住する留学生の健康と生活に関するニーズ調査」第23回日本国際保健医療学会学術集会、2008年10月25・26日、国立国際医療センター国際医療

協力局・研究所、国立感染症研究所。

〔図書〕(計5件)

高久嶺之介『近代京都と地域振興 京都府の近代』思文閣出版、2011年3月、347頁。

田端泰子『日本中世の村落・女性・社会』吉川弘文館、2011年2月、320頁。

細川涼一『関東往還記』平凡社東洋文庫、2011年1月、318頁。

野村幸一郎『宮崎駿の地平 広場の孤独・照葉樹林・アニミズム』白地社、2010年4月、235頁。

田端泰子『細川ガラシャ』ミネルヴァ書房、2010年2月、231頁。